

Dr.下田の

論文執筆無双

ストーリーで紡ぐ新たな執筆術

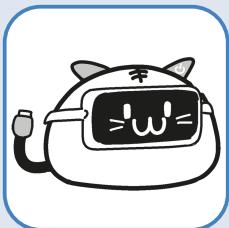
著 下田真史

結核予防会複十字病院呼吸器内科



中外医学社

キャラクター紹介



てべ猫

Dr. しもだに付きまとうネッコ。

本書では勝手にAIロボットへ改造され、論文執筆のコツを教えることとなつたが、本人は気にしていない。



Dr. イッチ

診療に慣れてきた後期研修医。しかし、論文の執筆経験はない。

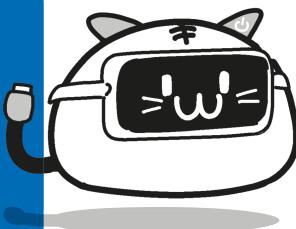
名前とは裏腹にあの掲示板とは無縁の生活を送っている。



Dr. しもだ

筆者。中二病との戦いに勝利し、平和になった世界で暮らしている。

中二病が時間と共に復活するタイプのボスだと知らずに……



1 どうやって論文を書けばいいの？

イントロダクション



Dr. イッヂ 「ハロー、てべ猫。こちら Dr. イッヂ」



てべ猫 「ハロー、Dr. イッヂ。こちら 猫型 AI・TB cat、通称 てべ猫だよ。なにか手伝うことはある？」



「J-OSLER も終わったし、そろそろ 専門医を取得しようと思うんだよね。俺が試験を受けるのにあと必要なものはある？」



「Dr. イッヂが専門医試験を受験するためには、学会に関連した論文 3 本以上が必要だね」



「え、論文？ 3 編？ え、1 本もないよ」



「うん。頑張ってね。（スリープモードに移行します…）」



「ちょっと待て！ そんなのいきなり言われても困るって！」



「Dr. しもだの話では 1 本の論文に最低 1 か月はかかるって、アクセプトまで 最短で 投稿後 3 か月だそうだよ。今から 3 編は大変だね。じゃ、また」



「え、そんなにかかるの？ …あ、AI に論文を書いてもらえばいいじゃん。てべ猫よろしく」



「…（現在、てべ猫はスリープモードです。ご用のある方は…）」



「おい、こら！ ハロー、てべ猫！」



「ハロー、Dr. イッヂ。なにか手伝うことはある？」



「論文書いて」



「……」



「こいつ、頑なにやらねえな。じゃあもういいや。自分でやるから論文の書き方を教えて」



「えー、しょうがないなあ…ちなみにDr. Ichijoが論文を書く理由ってなに？」



「俺が論文を書く理由…？」

● あなたのモチベーションはどっち？

論文を書くモチベーションは様々です。患者さんのために医学を発展させたい、大発見をして医学の歴史に名を刻みたい、業績を積み上げて出世したい、なんかわからないけど興味がある、はたまたDr. Ichijoのように専門医や上司の言いつけて必要に迫られたなど、十人十色だと思います。別に高尚な理由を持てというつもりはありません。重要なことは、執筆する理由を明確にし、自分のモチベーションがどういったものか整理することです。それをもとに自分にとってのゴールを設定してください。業績を積み上げたい人は1本書ければ良いというわけではなく、次もその次も論文を作成し、自分一人で書けるようになるのが目標となります。一方で専門医取得のために書く場合は、受験までの期間が限られており、速やかにかつ最小限の労力で作成することが求められるのではないでしょうか。もちろん論文を書く全ての人が学術的な発展のために書き続けることが理想ではありますが、現実問題そはずいぶんと厳しくなることがあります。なので、本書では誰でも論文が書けるよう実際に執筆する順番で解説をしてゆきます。そして **#とりあえず1本派** と **#書けるようになりたい派** に分けたアドバイスをしていこうと思います。

<本書の特徴>

- 論文を書く順番に解説（この本を読みながら書いてみましょう）
- **#とりあえず1本派** は早くかつ最小限の労力で書ける

- # 書けるようになりたい派 は今後自分で論文を書くためのポイントがわかる
- 症例報告と臨床研究が中心（基礎研究、治験、Review、メタ解析は範囲外）



「とりあえずは専門医をクリアするのが目標だけど、いずれは自分一人で書けるようになりたい」



「Dr. イッチの希望は承認されたよ。じゃあ論文を書くのが趣味だという Dr. しもだの論文執筆方法を参考に解説してゆこう」



「さっきから言ってる Dr. しもだって誰？」



「中二病論文を書いたことで有名だよ^[1]」



「いや、だから誰？」

そもそも Dr. しもだってどれくらい論文書いてるの？

さて、論文の書き方を解説する前に、本書を書く Dr. しもだが何者か、少しだけ紹介させていただきます。Dr. しもだは上司の先生が目の前で論文を書き、データ解析しているのを解説付きで見させていただいて勉強しました。自身で本格的に書き始めたのは 2021 年頃からですが、最初は本当に出来の悪いものを書いていたと思います。それを上司の先生に添削していただき、徐々にステップアップしてゆきました。

Dr. しもだの近年の業績（英文で筆頭著者のみ）

2021 年 原著論文 5 編（前向き研究 3 編）、症例報告 3 編、

Letter 2 編

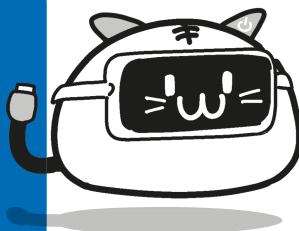
2022 年 原著論文 6 編（多機関共同研究 1 編）、症例報告 2 編

2023 年 原著論文 7 編、症例報告 3 編

2024 年 原著論文 4 編（前向き研究 1 編、多機関共同研究 2 編）、症例報告 1 編

2025 年 原著論文 7 編（前向き研究 2 編、多機関共同研究 2 編）

※ 2025 年 10 月現在



7 読者に届け Introduction

#書けるようになりたい派

イントロダクション



Dr. イッヂ 「ハロー、てべ猫。ぶっちゃけてさ、Introduction っていらなくない？」



てべ猫 「ハロー、Dr. イッヂ。急にとんでもないと言いたしましたね。なんでさ？」



「前置きとか別に求めてないでしょ。題名でだいたい何の話かわかるし、アブストラクトもあるしさ、いきなり結論に行けばよくない？」



「言いたいことはわかる。でも、読者の目線で考えてみてよ。その研究にどんな意味があるって、何の役に立つかわからないと読む気しないよね。Introduction で興味をひかない論文は読んでもらえないよ」



「なるほどな」



「論文を書く身としては、他の論文の Introduction にはこれまでにわかっていることがまとめられているからエビデンスを調べるのに役立つんだよね」



「それは便利だ。ただ、そのまま引用すると孫引きになるから注意だな（→ P.18）」

● Introduction の流れ

Introduction では、テーマの背景と目的を明確にすることで、研究の意義を示します。すでに Results を書いていれば研究結果が判明しているはずです。その結果につながる背景・目的を記載し、なぜこの研究が必要であったか、研究結果を得ることにどのような意義があるのかが読者に伝わるように書きましょう。



ここでも「Risk Factors for Bloodstream Infection in Patients Receiving Peripheral Parenteral Nutrition (PPN)^[1]」の報告を例に挙げて解説します。大まかな流れは、①報告する分野の提示、②既知の情報、③それとは反対の事実・疑問点、④仮説→証明するために研究を行った、となります。まずは箱書きを書いてみましょう。

箱書き



①報告する分野の提示：末梢静脈栄養と血流感染症

- 末梢静脈栄養は経口栄養や経腸栄養が困難な患者にとって、中心静脈栄養に代わる安全で効果的な方法
- 経口摂取が困難な症例の約50%は末梢静脈栄養で効果的に管理できる。
- 中心静脈カテーテル挿入に伴うリスクを回避し、看護の負担の軽減、コスト削減、栄養サポート開始の遅れを防ぐことができる。

②既知の情報：末梢静脈栄養は0.03-2.2%で血流感染症を引き起こすが、中心静脈カテーテルの方が血流感染症のリスクが高い。

③それとは反対の事実・疑問点

- 末梢静脈カテーテルと中心静脈カテーテルの間で血流感染症の発生率に有意差がないという報告がある。
- 院内発症のカテーテル関連血流感染症の22%は末梢静脈カテーテルに起因するといわれている。

④仮説：末梢静脈栄養は血流感染症の危険因子である可能性がある。しかし、末梢静脈栄養投与中の血流感染症の発生率と危険因子についてのエビデンスは乏しい。

→仮説の証明をするために研究を行った

①報告する分野の提示：末梢静脈栄養と血流感染症の関係

箱書きが完成したらそれをつなげてゆけば完成です。「第2章 Case report編3. Introductionは読者のために（→P.51）」でお話しましたが、テーマのどの点を中心に書き始めるかを考えます。この論文では「末梢静脈栄養」か「血流感染症」の2通りのアプローチを考えました。

(例)

末梢静脈栄養の観点から＝「末梢静脈栄養は経口栄養や経腸栄養が困難な患者に